続々 パイプのけむり

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイ

團 伊玖磨

朝日新聞社

続々 パイプのけむり

團 伊玖磨

朝日新聞社

團（だん）　伊玖磨（いくま）

大正13年4月7日東京生れ。昭和20年東京音楽学校（芸大）作曲科卒業。以後作曲ならびに自作の演奏に従事。昭和41年日本芸術院賞受賞。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。日本芸術院会員。

作品　歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」「ひかりごけ」他，交響曲5曲他，歌曲，劇音楽等作品多し。

著書　「朝の国・夜の国」「不心得12楽章」「エスカルゴの歌」「パイプのけむり」「続パイプのけむり」「又・パイプのけむり」「かんぢぁせいしょん・たいむ」「又々・パイプのけむり」「九つの空」「まだ・パイプのけむり」「僕のハロー・グッドバイ」「まだまだ・パイプのけむり」。

p. 62「お正月」東くめ・詞
p. 98「金色夜叉」後藤紫雲・宮島陬芳・詞
日本音楽著作権協会出認第423778号

続々・パイプのけむり

昭和43年4月10日　第1刷発行
昭和49年7月10日　第17刷発行

定価　820円

著者　團　伊玖磨
発行者　朝日新聞社　岡見　璋
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

Printed in Japan　0395-253368-0042
© 1968 IKUMA DAN

続々　パイプのけむり

もくじ

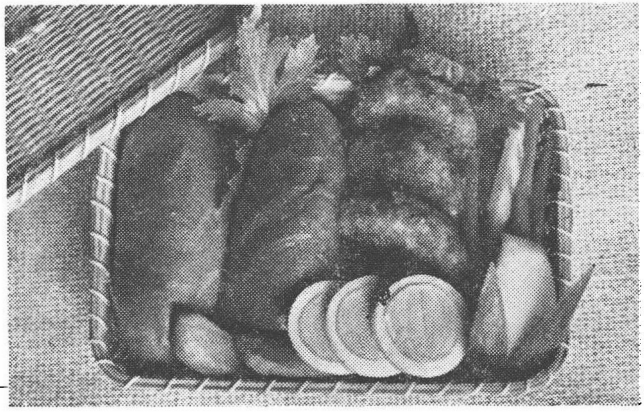
御辨当 5
「が」 10
鮨 16
外米 21
横浜中華街 26
空の上から 32
年賀状 43
犬 48
髯 53
机の上 58
酒中迎年 62
四不像 68
螺汁 74
カヴァー 79
雪 84
吸殻入れ 90
冬の宿 95
顔 105
うみたなご 118
迷信 123
娘心 128
休日論 135
潮時表 140
禁句 145
靴篦 150
金と銀 155
銭音 161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

麺麭 171
金米糖 176
トウキョウサンショウウオその後 181
朝湯 186
無銭旅行 191
ナイトクラブ 202
ステップ 207
岩煙草 212
高師小僧 214
ある記憶 224
剃刀 234
パジャマ 238
果実酒 243
借家の夏 249
南蛮杖 254
池水浄芝 259
買い食い 265
お茶 272
汗管腫 277
ジンクス 282
税関 287
レッテル 300
妙な趣味 305
ディスカッス 311
地蔵堂境内 317
一衣帯水 331
あとがき 345

題字・岡島伴郎
カット・吉沢家久
写真・朝日新聞社

御辨当



41・10・21

小学校に上がって一年生になった時は、何(ど)うでも良いような事だけれども、御辨当は要(い)らなかったように思う。恐らく、授業は午前中で済んでいたのだろう、遠足や、特別の場合以外、御辨当を持って通った記憶は無い。ただ覚えているのは、早く御辨当を持って学校に通いたいな、と思った事だけである。

二年生になって待望の御辨当を持って通学するようになると、妙な事なのだが、家からアルミニュームの辨当箱に御飯を詰めて貰って行くと、麵麭(パン)が食べたくなるのである。そして、学校に出入りしていた麵麭屋から麵麭を買う事にして、家から御辨当を持って来な

いと、御飯の方が良かったと思うのである。従って、僕は、アルミニュームの辨当箱の蓋を開けてほそぼそと御飯を食べている時は、級友達の食べているクリーム麵麭や餡麵麭を羨しそうに眺め、チョコレート麵麭や葡萄麵麭を頬張っている時は、海苔巻きや、鱈子の載った御飯を美味しそうに食べている友達の方を上目遣いにちろちろ盗み見ていて、要するに意志の弱い詰まらぬ子供だったものだと思う。

学校に出入りしている麵麭屋は二軒あって、一軒は裏門の前にあり、一軒は表門の傍にあった。僕は、家の方向の関係で、裏門から出入りしていたから、裏門の前の麵麭屋で買う方が筋であったのだが、何ういう訳か、表門の麵麭屋は、一食分十銭の麵麭を買うと、おまけに古銭を一枚宛呉れるのだった。真逆本当の古銭を呉れる筈も無いから、呉れたのは大量生産の贋物だったに違い無い。それが子供にとっては大層な魅力だった。従って、僕は、家から御辨当を持って来ない日には、裏門の顔見知りの麵麭屋の前をどきどきして通り過ぎては、遠道して表門の麵麭屋で、カレー麵麭やフランス麵麭を買った。裏門の麵麭屋は、おまけに何も呉れなかったし、表門の麵麭屋の呉れる贋物の古銭は、食後の昼休みに、校庭のコンクリートの上で、水を付けて磨くと、寛永通宝などという、古風な文字が、ぴかぴかと真鍮色に浮き出して、それが何と無く宝物のような気がして、良かったのである。

ところがそのうちに、裏門の麵麭屋が、表門の麵麭屋のおまけ戦術に気が付いたのであろう、負けてはならじと、珈琲角砂糖という妙な物を二箇宛おまけに付けるようになっ

た。珈琲角砂糖というのは、此の頃は殆んど見ることも出来なくなったが、角砂糖の中に、珈琲の粉と称する物が入っていて、それに湯又は水を注げば甘い珈琲が出来るという寸法の、見たところは普通の角砂糖と同じ一件で、但し、本当の珈琲の粉が入っている訳では無く、恐らく大豆を炒った粉ぐらいが入っていたのだろう、湯を注いで出来たその旧式インスタント珈琲は、何と無く焦げ臭く、ただ薄甘い、悲しい味のする物だった。湯の無い時にはその儘口に中に抛り込んでも良かったが、そうしてみても、矢張り、悲しいような香りのする、妙な物だった。それでも、子供にとっては、珈琲角砂糖は、贋物の古銭に較べて、優るとも劣らぬ魅力であった。

従って、僕は、御辨当を持って行けば、麵麭が羨しく、麵麭食にすれば、御飯の御辨当が羨しい上に、表門で買って古銭を貰うか、裏門で買って珈琲角砂糖を貰うかという迷いが加わる事となり、何(ど)うして良いか判らないのであった。全く以って、実に詰まらぬ子供であったと思う。そんな事に迷っている位だったから、成績も悪かった。

そのうちに、又、妙な事が起こって来た。近くに坐っている級友達が、團君が家から持って来る御辨当のおかずは贅沢だと言い出したのである。そうして、左手で隠すようにしてこそこそと食べている僕の御辨当を覗き込んでは、やれ、今日は卵焼きだ、贅沢だ、今日は菠薐草(ほうれんそう)だ、贅沢だ、今日はカツだ、贅沢だ、と言うのである。そして、見れば、彼等

のおかずと僕のおかずは、何等変る事無いのである。要するに、彼等としては、そんな事を言って揶揄う事によって、小心な僕が狼狽するのが面白くて、それを喜んでいたのだろうが、言われる僕の方は生きた空も無く、内容を級友に見られまいと、ますます辨当箱の上を手や蓋で覆い、こそこそと、上目遣いに周囲を窺い、級友に見られる前に、一早くおかずの方を皆呑み込んでしまってから、後で、味の無い御飯を頬張るのだった。我ながら全く詰まらぬ子供だったと思って、情無くなってしまう。

流石に、中学校に入ってからは、だんだんにそんな詰まらぬ事に神経は使わなくなったし、有るは唯食慾だけになって来たから、麺麭だろうが、御飯だろうが、がつがつと貪り食っているうちに、背が矢鱈に伸びて、妙な事に神経を使わなくなった為めだろう。成績も良くなって来た。

この間、何と無く四、五人で待合のようなところに居たら、女将が来て言うには、御料理も変りばえが致しませんから、美味しい御辨当になさっては如何でしょう、和食の御辨当も美味しう御座居ますし、洋食辨当も宜しう御座居ますよ、と言った。

其処に居た四、五人の連中は、俺は洋食辨当だ、あら、私は和食よ、私は洋食の方が良さそうだわ、などと賑やかだったが、僕はどちらにして良いか、迷った揚句、判らなかった。洋食辨当をとれば、いざ食べる時になって和食辨当が羨しくなり、和食辨当をとれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ば、結局洋食辨当が羨しくなるだろうと思って迷ったのである。そして、そんな詰まらぬ迷いに入り込む位なら、何も食べずに酒だけを呑んでいよう、と決めた。

暫らくして、綺麗なお重に入った幾つもの御辨当が来て、皆は美味しそうに箸を動かし始めた。僕は、羨しそうな顔をしないようにして、酒だけを呑みながら、時々上目遣いに友人達の美味しそうな御辨当の方を盗み見ていた。

その時、急に、僕は、長い間忘れていた小学校の頃の御辨当の悩みを思い出したのである。そうして、全く僕は詰まらぬ子供だったのだなあと思い、今もなお詰まらぬ人間なのだなあ、と思った。

「が」

41・10・28

久し振りに我が家の机の前に坐って、落ち付いて仕事をしようと思った。ところが、五線紙を拡げようにも、原稿用紙を置こうにも、机の上は、書類の山で、邪魔でしょうが無い。そこで、先ず、それ等の物を整理する事にした。

僕の机は大きい。その大きな机の上の八割以上のスペースを占領して、封書や、葉書や、雑誌や、宣伝の書類、招待状の類いが何尺もの高さに積んであって、これでは、仕事にも何にもなりようが無い。

何で又こんな事になったかというと、暫らく家に居なかったからである。この夏は、七月から八丈島に渡ったきり作曲をしていた。

従って一切の手紙は見なかった。急に中国に行くことになって、八月の半ばからは日本に居なかった。帰って来たのは、九月になってからである。この時に、送られて来た書類や手紙は見る可きであったが、七月の続きの作曲を終えるためと、新たに依頼された作曲を始めるために、又、島に渡ってしまったので、既に相当な高さに積んであった手紙類はその儘にされた。僕は、作曲に入ってしまうと、一切の手紙類は読まないのである。ところが、一週間もしないうちに、今度は、又、ヨーロッパに行かねばならない用が起こったので、九月の十五日に発って、一ケ月程、イタリー、フランス、ドイツ、イギリスで用を済ませて、昨日帰って来た。

帰ってみると、手紙類は益々その高さを加えていて、いよいよ机の上の、僕の自由に使えるスペースは狭くなっていた。そこで、その整理にかかったのである。

整理と言っても、何も大して難しい事がある訳では無い。殆んど大多数は捨てれば良いのである。大きな屑箱を持って来て、僕は、どんどんと書類と手紙の山を捨て始めた。

僕は、送られて来る手紙、書類に、厳格な識見を持っている。従って、常にその識見を以って対処している関係で、僕が開封してその内容を読む手紙、書類は、その全体の一割にも満たない。まず、一切の宣伝関係の書類は開封せずに捨てる。薬屋、不動産会社、新規開店、バーゲン・セール、その他、一切の宣伝関係のパンフレットや書類は、封筒からして品位が無いからすぐ判る。これらを先ず屑箱の中に叩き捨てる。次は、映画、演劇、

演奏会の招待状を纏めて捨てる。これは、どんな良いものでも、全部捨てる。何故ならば、観度い物、聴き度い物は、自分で切符を買って行く事にしているからである。次に、一切のアンケートに類する物を破り捨てる。詰まらぬ事に、御意見を、などとちゃらちゃらされる事は嫌いだし、大体、葉書や封書で他人の意見を安直に聞こうという精神が良くない上に、それを雑誌に載せようなどとは、見当違いである。これらのものは、捨てるだけでは無く、その精神に対処して、幾つにも破り捨てる。次に、頼みもしないのに、向うから勝手に送って来る、同人雑誌の類いを皆捨てる。

こうして、次から次と開封せずに捨てて来ると、結局、私信だけが残って来る。次にはこの私信を良く観察する。先ず、封筒の上書きを見て、僕の名前を略字の団で書いてある物を皆捨てる。僕の名前は、團であって、団では無い。従って、他人宛の手紙は読む訳には行かぬから、団と宛名を記してある物は全部開封せずに捨てる。そうして、残った手紙と書類だけをゆっくりと読み、考えた上でゆっくりと返事を書く。これが何時もの決りである。

今日も、厳重に撰り分けをして、殆んどを捨て去り、最後に、こちらの識見にパスした二十通ばかりを読み始めていると、玄関の前の小砂利をちゃりちゃりと蹴って走る足音がして、子供が学校から帰って来た。子供は、台所口で「只今」と大声で叫んで、ランドセルを背負った儘、家の中に馳け込んで来た。そこで、僕は、机に向った儘、

「が」と叫んだ。
子供は、心得たもので、
「よ」と叫びながら、自分の部屋に行き、ごそごそと、ランドセルを下ろしているらしい。そこで、こちらが、今度は、
「きゅ」と叫んだ。
ランドセルを下ろして、部屋から出て来た子供は、僕の顔を見てにこにこしながら、
「お」と言った。
「お帰んなさい」と僕が言った。
子供は、もう一度、
「只今」と言ってから、
「パパちゃんも久し振りでお帰んなさい。遠い旅行で大変でしたね、お疲れでしょう」と大人びた事を言った。

子供が帰って来た時に、僕と子供が「が」とか「よ」とか言い合っていたのは何かと言うと、これは、長い間に出来上がって来た符牒なのである。
何時も何時も、子供が学校から帰って来ると、僕と子供は、次のようなやりとりをしていた。
「学校はどうだったかね」

「良かったです」

そして、

「給食は美味しかったかね」

「美味しかったですよ」

それを何百回も繰り返しているうちに、何時の間にか、そのやりとりは符牒になって来て、行の一番始めの音だけを言えば事足りる習慣となり、

「が」

「よ」

「きゅ」

「お」

という言い慣わしが出来上がって来たのである。

子供は、大人びた事を言ってにこにこしていたと思うと、何処かへ遊びに行って仕舞い、僕は、手紙の返事を書きながら、

「が」が「よ」であり、「きゅ」が「お」であるうちは、まだまだ安心だが「が」が「わ」になり「きゅ」が「ま」になるとこの子も心配をかけるようになるだろう、などと考えていた。そして、長い間には、こんな不思議な省略さえ習慣になるのだから、もうそろそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com